

野尻抱影・星の和名の研究書簡（その 2）

坂井義人（モンゴル天文台）、小島茂美（四国天文協会）、
浅木宏（野尻研究家）

1 はじめに

2012年8月2日開催の第3回天文台アーカイブプロジェクト報告会及びその集録にて、筆者は亡父・坂井義雄より継承した野尻抱影・星の和名研究書簡について紹介をした。それは岐阜県西部地域にて採集され、野尻氏と和名蒐集家・香田寿男氏についての関係を含めた、推論を交えた議論を展開したものである。それを受けて、33通にも及ぶ野尻氏より香田氏への葉書については、その折に不明推論のままに推移した相互関係等の再評価と、その難度の高い文字解読作業についての結果を追報告するものである。

幸いなることに、共著者の小島茂美は天文アマチュアながら書道教育家、また浅木宏は野尻関係の事跡につき自身はファンと称しつつも、両者は深い知識と洞察力を糧として、筆頭著者（以下・坂井と表記）の及ばぬ諸点を補いつつ、今般、野尻葉書解読を中心として、共同作業を本年晩春に終了した。この報告文は、坂井を筆頭として、小島、浅木の三名の連名の報告である。

2 野尻抱影書簡について

岐阜金華山天文台を代表した亡父・坂井義雄は、その経緯は不明ながら、野尻抱影氏の香田寿男氏あて直筆 33 通に上る「星の和名研究」に際する葉書類その他を所有した。昭和 24 年から 29 年までのもので、記載の内容は香田氏による星の和名蒐集に対しての感想その他を記したものである。今回その全てを、小島茂美、浅木宏両名の努力により全ての未解読内容を明らかにする事が出来、内容的には重要な認識をすべきものも含まれている事実を確認出来て、その解読の意味は極めて大きい。

以下、特に興味深くまた我国の星の和名由来と考えられる蒐集内容を示すと共に、その解釈を試みたい。今回は特に重要な内容を再録し、残りは未だ別の観点から分析する事も必要事と判断し、将来にかけて再度紹介する事としたい。

3 香田寿男について

第3回アーカイブ研究に於いては、筆頭筆者の不勉強さが元凶となって、香田氏の活動の内容を明らかとするのみで、その個人的な事跡の追跡とか、いささか複雑なる同氏の環境と対人関係などは多くが明らかに出来ず、謎多き人物としてしか紹介する事は出来なかった。岐阜県西部（西美濃地方とも言う）の谷汲村、特に勤務先の横蔵小学校及び中学校の生物理科教師程度しかその人物像も分らぬままであり、亡父主宰の岐阜天文台会員のみとしか明らかに出来なかった。

所で、ここで過去の幾つか明確に出来なかった事柄は、野尻葉書解読担当を小島とともに担当した浅木より、その鋭い指摘をうけた。それは、かなり正確なる野尻氏と香田氏の関係について先行的紹介の著作があり、それら疑問等は一気に氷解した。それは、野尻氏の弟子とも謳われた往年の天文学者・石田五郎氏の著作『聞書 星文化伝』1989年 P.313 に既にその紹介が存在したのだった。

（1）香田寿男についての疑問

野尻抱影氏の葉書には、先ずその宛名名として、「香田寿男」と「香田まゆみ」、場合によって「香田真弓」との複数の宛名が使い分けられていた。香田の姓は同じで「まゆみ」と「真弓」同一人物とは判断される。この名は、一般的には女性名と判断され、何やら「香田寿男」は夫であり、また「香田まゆみ」はご内儀で、共に気付先がそれぞれ

同じ勤務校の場合もあったり、また別々の学校の場合もあったりで、移動により夫婦別職場とか同じ学校であった等の夫婦教員とすら思えた。ここに少し追説明をすべきなのであるが、前回も紹介した如く、葉書のあて先などの表側は襖の製品カタログの色彩和紙に貼り付けられてしまっており、それらを無理に剥がすことは不可能なる状態も手伝って、事情はより複雑となり、それらは推論の域を出なかったという事でもある。即ち、「香田寿男」と「香田真弓」は、別人格と坂井は判断したという見解を前回紹介したのだった。実はこれが最も大きい判断の誤りであり、事実是一言で記すと以下の如くで、坂井自身も驚いた次第である。

香田寿男 = 香田真弓・まゆみ

余りにも、この二つの名前は男性と女性の別人格と判断され、二人の香田という人物がまさか名前の使い分けとは到底気づく事は困難であった。しかし、これで先ずは、寿男は本名であり真弓(まゆみ)は、ペンネーム的な表記である事は確かとなった。ただ、この名の使い分けは、当初は野尻抱影氏も迷ったようで、女性の星の和名蒐集家であり、女性俳人と思ったようだと、石田氏の著作には紹介されている。当然そうだろう・・・、としか言いようは無いのであるが、まあとにかく一軒落着となったのだった。これは、知っていて当然のような気もするが、野尻氏の事は実は坂井はそれほどには深くは知らず、時折の野尻氏著作に出てくる「香田君」という人物表記程度の知識内容なのである。とにかくは恥じ入る次第である。共同作業の浅木氏の指摘に、目の鱗が落ちた想いを感じて、野尻ファンの力量を再認識せざるを得なかったと言うべきである。

なお、これは言い訳めいてはいるが、何ゆえ時に「香田寿男」と記載したり、また「香田真弓・まゆみ」を書簡宛名に使い分けたのか、今以って野尻氏の真意は計り知れない。とにかく野尻先生・・・これはイタヅラですかと、せいぜい言うくらいである・・・。今頃はお腹を抱えて笑っておられる事だろう・・・多分。

また、明確な記憶はないものの、坂井は香田先生には多分あっているのではとも思われる。和29年にして僅か三歳の記憶では無理ではあろうが、当時の金華山天文台での野外でコッペパンを片手に好青年の男性と一緒に写った写真が残っており、この人物が香田氏ではないのかと、感ずる次第である。亡父・坂井義雄に聞いておくべきだったと悔やんでも・・・いまさら如何ともし難い・・・嗚呼。

(2) 香田真弓という名前表記の面白さについて

上記をお分かり頂いたとして、では『真弓』と表記した理由についても紹介したい。女性名としては真弓と称することは確かに存在し、野尻氏も当初は女性俳人として認識されたのは、文学者の知識からすれば当然でもある。そして実際その如くで、このペンネーム的な名は、俳人としての称号とのことである。これも石田氏の著作に明確に記されており、香田寿男は、とにかく理科系教師と言いつつ、文系的な能力も舌を巻くほどで、後に野尻氏も何か分らぬ事があると、すぐに香田氏に手紙を書いて教えを乞うたと言う。江戸歌舞伎の台詞を全て諳んじていたくらいのプロ並みの勉強家であったとあり、趣味ではあろうが理系を生業としつつも、こうした能力は現代社会では稀有の存在と言えそうである。最近の理系人間は、なかなか心豊であるこうした話の中に、聞くべきものがあるのではとも思えるほどである。石田氏の紹介する香田氏の逸話には、今となっては聞くにも聞けぬ色々な逸話があり、じっくり読んでみる事も大変に興味の湧く噺となっている。

さて後回しになったが、真弓の命名経緯を石田氏に従って紹介したい。香田寿男氏は、かなりの高い能力を持った俳人・雑俳家と紹介されている。そして、高名なる俳人の高浜虚子に心酔し、それに準じて『虚矢』(きよし)と称したのだと言う。香田虚矢という事であろう。ただこの俳名は余りにも恐れ多いと憚ったらしく、改めて言葉のお遊びよろしく『虚』の反対語(対語)として『真』、また『矢』の反対語とし『弓』と改名したのだと言う。香田真弓の誕生である。これで「まゆみ」の由来も得心できた。

なるほど、歌舞伎台詞の大家であると言う意味が良く分る気がした。かかる経緯で、その後は香田寿男を本名として、真弓または平仮名の「まゆみ」を使い分けたのであろう。この香田の意思を重んじて、時には「寿男」「真弓」「まゆみ」を野尻氏も使い分けたのであろう。そして野尻書簡等にその使い分けはまだしも、野尻氏著作にもこの名を使い分けて、「香田寿男」(岐阜)と使ったり、「香田まゆみ」としたりで、その差異に躊躇する事も多く、やはり岐阜には二人の香田がいるのではと読者も迷われたのではなかろうかと思われる。ただし、同じ著作内でのその使い分けは無く、比較的「香田寿男君」と蒐集者の氏名の紹介備考をつけており、いずれにせよ、香田寿男氏は野尻氏の片腕の如き存在であったようである。野尻氏著作には、他にも全国的に蒐集家の紹介も多くあり、それらは言わば天体観測でのデータ取得を務める天文台の観測係りのような存在と言えるべく理解されるであろう。以下に、浅木指摘の著名なる石田五郎著作の一部転載を示したい。明確に香田氏の来歴の理解が可能である。石田五郎著 聞書「星の文化伝」・1989年 P.313~P.314に記載。

香田寿男は美濃谷汲寺(谷汲村?) 近くに住む中学の生物教師。雑俳家ではじめ「虚矢・・きよし」と号したが虚子の名をはばかって、この対語の「真弓」を用いた。戦後、外地より復員、オリオン座(獅子座の誤り?)の和名「樋かけ星」・・トイカケホシ・・を報じて抱影の弟子となった抱影ははじめ「香田まゆみ」を女流俳人だと思っていた。

京都大学映像ステーションで行われた第3回アーカイブプロジェクト及びその印刷集録と大学IP図書リポジトリ所載の香田寿男氏についての論考の誤り、そしてその修正は以上の如くである。今回の集録報告と合わせてその背景を含めてご了承ください。誠に幸いである。また今回の末尾には、石田五郎氏の著作、そして野尻氏の大量の星和名に関する文献類の記載は今回は敢えてせず、読んでいただく方のご判断に任せたい。楽しい野尻氏の著作集に、どうか遊んで頂きたい。

なお、別途に野尻氏ご実弟を顕彰した「大仏次郎記念館」(横浜市)には、遺愛屈折望遠鏡ロングトムをはじめ、数多くの野尻著書も収蔵されている由である。場合によっては、書簡類その他も受け継がれている可能性もあり、発掘対象としては貴重で、心ある方の後進研究を望む次第である。また、山本一清博士と野尻氏との書簡のやり取りも相当にあった模様で、京大の山本資料保管室には保存されている。今後の両氏の関係解明にも、挑戦される意欲ある方の出現を期する所である。

(3) トイカケホシについての野尻書簡その他を例示

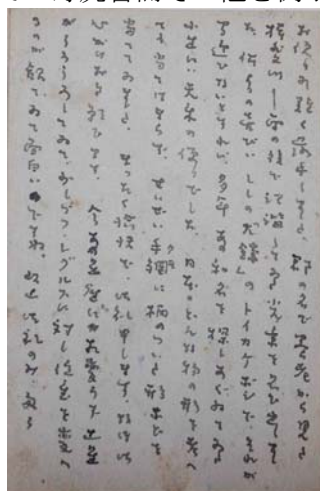


写真1 トイカケホシ採取について野尻氏自筆葉書

★ 昭和 24 年 3 月 15 日・横蔵村 香田まゆみ・トイカケボシ

お便り有難く落手しました。郡の名で養老から見た揖斐川一雨の後で氾濫している光景を思ひだしました。何よりの喜びはししの「大鎌」のトイカケボシで、それが間違ひないとすれば、多年のあの和名を探しあぐねていた小生に、天来の便りでした。日本のどんな形を考へても当てはまらず、せいぜい手網タモに柄のついた形などを当ててみました。全く愉快で御礼申します。〇〇御心がけおき願ひます。今あのボシに相変わらず土星がうろうろしてゐて、少しづつレグレスに対して位置を変へるのが、観てゐて面白いでね。以上御礼のみ 早々

注釈

この葉書が、トイカケボシは「獅子の大鎌」を証明したと言われる幸田宛の野尻葉書の証左である。石田五郎氏の解説にある記載で、香田氏はこの報告で野尻氏弟子となったと言う。

4 野尻葉書 6 通の解説内容（解説担当 小島 浅木）

以下は坂井義雄所有の野尻直筆葉書 33 通より特に重要と思われ、興味深いと思われる 6 通のみの解説結果とそれに対する説明等を掲げる。（〇は解説不明文字）。

★ 昭和 24 年 9 月 19 日 トイカケボシ その他収集の感想(マンガボシは不明)

お便り有難く拝受しました。特に御地の星の和名をお集め下さった事は百人の読者にまさる喜びです。トイカケボシの発見は、年来の望みのかなったもの。フォーマルは宇土のアカボシ、アマノガワボシ(いい名です)。

ふたご α β のキンボシ、ギンボシ(やや出来すぎてゐる感)も、喜ばしい収穫でした。(マ)(ン)(ガ)ボシは、相当広くいはれてゐます。岐阜の星名も控へてありますが、これだけの採集は初めてで、一度に貯蓄がふえました。先頃キヌボシ(金星も絹ですが、十か九つに見える・・・乱視(?)の里謡(?)で、岐阜市の(か)(た)(か)(ら)・・・方・・・和星を〇〇〇〇、これは中国地方でいふのとおなじでした。 御礼まで 早々

★ 昭和 25 年 3 月 1 日 ゲンジボシとヘイケボシの発見推論

お便り有難う。サンカク・シカク・ゴカクはそれぞれ名となつてゐますが、(北)(斗)をさういう風に見て、名づけてゐるとすれば珍しい採集です。ゲンジとヘイケは山本博士が名をつけたのが最初と信じますが、果たして昔からあったら見つけものです。村の古老がまったくそう言つてゐるでせうか。発表のために確実な調査を待ちます。獅子のトイカケボシのやうな優秀な名が現われて来るといいと思います。

晴夜は火星がたうとうスピカの上に到着、珍しい観物でした。もう少し下だったら、面白かつたでせう。

★ 昭和 26 年 1 月 17 日 美濃伝承の星と占領国家の悲哀

御年賀有難く御礼申します。まだ独立した国ではないで、今年も賀状控へました。もう一つの御礼は一枚のお葉書の番号が入選で切手が当たったといふ話です。これではせつせとご返事を、しなければ成らないわけです。

先ごろ、恵那〇村の新(聞)(部)から依頼されたので、「美濃伝承の星」を寄せました。〇として「揖斐郡の K 氏」からの(教)へによる事を断りました。同誌、月末にはお送りできる事と思ひます。今年には本にまとめたく、その節は貴名をお借りします。

雪嶺出て早や(拝)まるるロクジゾウ 影

こんな句を挿みましたが、恵那岳がその方向かどうかは知りません。こちらでも二三日(分)(も)雪、今は早春の陽うららです。

★ 昭和 26 年 3 月 29 日 義宮（常陸宮）のエピソード

三十三間堂の画はがき、昔からこれを見るたびに、この一角にある柳の大木生命に〇って〇〇を感じます。これが星となったらこの大(字)箔の落ちた仁王の裸像になっているでせう。しかし〇〇も久しいかず、「〇〇」といふ雑誌の寄稿するのに苦心しました。この頃、旭川のアイヌの星の伝説で、すばらしいものを四、五入手。その中整理して発表するつもりです。

トイカケボシの下の土星も少しづつ見頃になって来ました。昨夜今頃、義宮さんにこの話をして上げた時、スピカが大好きだと言われたのを特に珍しく聞きました。アメリカへ六地藏が送られた由、地藏の六体は昔から定まってゐることで、スバルを〇して(数)から言ったのか、この連想で言ったか、面白い問題となりませう。

★ 昭和 27 年 12 月 21 日 『天文岐阜』の話題・坂井義雄編集冊子

押し詰まって東京はバカ騒ぎをしているやうですが、クリスマスの猿真似など不愉快で、いっさい炬燵で読書に暮らしてゐます。このところ(放)(送)が大分続きました。「天文岐阜」はまだ入手していませんが、ぜひ拝見したいものです。天体と宇宙はひどく世話をやかされました。あなんバカ親切な本は無く、そのかわり再版になっても赤字で、とくに品切れになってゐるのにまだ出せません。御役に立っても光栄ですが処々ミスがあり、どうして眼を逸したかが不思議です。P135 大阪名城の写真は〇(造)、P223 の下の写真の説明文字誤り、P220(十三の)「十六年」は「百六十年」、終わりの行「五百年」は「十万年」、P49 十二行一・七秒は「十七・六秒」などの他に、お気づきがあったら御報下さい。P204 図版も 8.6 光年は 8.7。本といふものはむづかしいもので、どんな大家もミスをやっています。況や読者は信じてしまふのだからサインンです。「新星めぐり」今本版が漸く出来た。誓子氏の真蹟は好評でせう。

★ 昭和 29 年 5 月 17 日 著作本・「星恋」の発刊

病人があつたので、どこへも御無沙汰。あの発表は大分反響がありました。いつかとも言いたやうに、そこの山地の方言を蒐集してごらんない。岐阜方言集いやうなものがありますか。中央公論社から、その中に新版「星恋」が出ます。誓君は新句(あの後の)を加える由。それと「星三百六十五夜」を頼んで来たので取りかかります。なにしろ一頁一随草か、散文詩付なので楽しくも又苦し。野間仁根君のカットを挿んで、豪華本にするつもり。それでは映画はどこへ行ってみますか。やはり見た方がいい。名古屋に天平飛鳥の美術展があつた由。見ましたか。

以上は 6 通の野尻葉書の小島・浅木両名の解説の結果である。解説途中で浅木の悲鳴「・・読み込みに難渋しています」という言葉は、本音である。写真 1 は 6 通の葉書以外に特別扱いで紹介するものであるが、トイカケホシ感想の葉書は大変に深い興味を喚起し、解説の経験を願わしい。なお、2014 年夏のアーカイブ集会の折に、この野尻見解には興味深い感想意見もあった。曰く、このトイカケホシを「雨とい」を支える鉄製の支持器具と見るには疑問が残るという指摘である。これが少なくとも明治以降程度であれば瓦屋根の下に、雨樋はあろうが、しかし仮に江戸期とかそれ以前であれば、板葺きとか藁屋根とか茅葺屋根には、樋(トイ)という器具は存在しないのではないかという指摘である。確かにその疑問指摘は分るような気がする。であれば「樋」という香田氏と野尻氏の共同見解は風前の灯火ともなってしまう。「とい」は「問いのマーク」の鏡文字のような印象すら抱かせて、間違いなくそれは誤りであろうが、まさか「問いかけマーク」という事であれば、笑ってごまかすしかない。どう考えればよいのだろうか。60 年の発見は露と消えるには甚だ惜しい。

また、「ヘイケホシ」と「ゲンジホシ」の採取に対する根源的な疑問もある。書中でのゲ

ンジ・ヘイケの名は、山本博士が始めて命名したのではとの野尻氏見解である。根拠も無いままに、元々は野尻氏グループの発見を山本博士が著書に採用したと考えてきたのが、完全に誤見解であると言う証左であり、源平合戦で破れ去った平氏は、ベテルギウスの新星爆発までには決着をと望んでいるかもしれない。その他の葉書にも、結構ほほえましいエピソードがしたためられており、読み方によっては大変に貴重で興味深いと思われるので、是非味わって頂きたい。

5 天文岐阜誌での研究紹介 香田寿男（ 壽男 ）

岐阜金華山天文台での簡易出版物はあるが、台報として、「天文岐阜」がある。以下に紹介するものは昭和 26 年もしくは 27 年あたりの天文台会員諸氏への印刷配布物であるが、その中に香田寿男氏による星和名蒐集の中間報告的な発表記事が二ページに亘り掲載されている。多分、論文的発表としては、野尻氏に和名蒐集報告を継続しつつも、一区切りの意味をもたせての執筆とされた印象である。この他にも 昭和 40 年前後と思しき星の和名紹介「奥揖斐の星」新聞記事等もあったようであるが、それらの詳細はこれ以上は明確ではない。野尻氏の協力者としての功績確認のため、今後の発掘の必要性を痛感する。以下の記事写真はページが連続ではないが編集事情かと思われる。現代ならば、学会発表にも耐える得る程の内容ではないかと思われるくらいである。



写真2 天文岐阜誌 P.7 掲載の「香田寿男・揖斐郡伝承の星名」 P.7

写真3 天文岐阜誌 P.4 掲載の「香田寿男・揖斐郡伝承の星名」

6 特に「源氏星・平家星」についての見解

山本一清博士著作の「星座の親しみ」は、現代ですら多方面からの注目が続いている。その中で「平家星」「源氏星」の紹介がある。即ち平家の赤旗と源氏の白旗になぞらえて、オリオン座のベテルギウス(赤め色)とリゲル(白め色)を示したものとされている。さて、ここで面白い事が判明して来た。この赤と白の星の和名は、果たして誰の採取なのか全く分らなくなっているらしいという事である。これは、この報告文に掲載した野尻書簡を共著者の小島と浅木の共同解説によって浮かび上がってきたものである。上記の解説紹介結果によると、この二つの一等星の命名経緯について、野尻氏自身が香田氏に対して、「・・・ゲンジとヘイケは山本博士が名をつけたのが最初と信じますが・・・」という感想と意見が書かれてある。

これは大変に面白い事で、香田氏も岐阜県での採取をし、それを野尻氏に報告したもの

と思われる。香田氏の野尻氏あての報告書簡等が発見されればその裏打ちとなって、その経緯が辿れるはずである。そこから考えられるのは、果たして山本博士は独自にこの二つの星に対して「平家星・源氏星」とオリジナリティにそう呼ぶように成られたのか、またはやはり天文アマチュアよりの報告であったのか、または民俗学的な伝承があり著書にしたためられたのか、そのあたりの事情は全く理解に及ばない。特に名著「星座の親しみ」の大正から昭和にかけての初期版には紹介は無く、後年の改定追記再販には記述されているという事から推論すれば、何か事情がある筈である。何時ごろから「星座の親しみ」に紹介が始まったのか、全期間中に発行された同書を、時系列的に並べることも必要であるが、果たして全ての版が残されているかは判然としない。少し閲覧したが、さすがに京都大学山本資料類にも全巻は残されていないようである。

7 結語

以上が野尻書簡葉書より代表的な内容の解説と、その推論及び解釈の試みである。未だ25通以上の野尻葉書もあるが、量的にも膨大で今回の紹介は断念した。いずれD-ROMなどの手段を用いて、ご希望の方様に配布も試みたいと思う。また、香田氏は野尻氏弟子としての評価を確認して、その意義は多きいのではないかと感ずる。パーシバル・ローウェルの著作を読み、ラフカディオハーン(小泉八雲)が来日し、そしてその弟子の野尻抱影は文学的星研究に従事し、そして香田氏を始めとし日本全国に星和名のアマチュア研究者が数多く誕生した。現代社会は、専門的師弟関係は多いが、こうした楽しい大河の流れは、もう見られないと危惧を感ずる。文化とは、そして星に集うとは、こういう価値観なのではないだろうか。それは先人への遺徳であり畏敬であり、文明そのものへの尊敬と自信でもあろう。

最後に1955年の野尻氏70歳誕生日の集いに参加したような感覚に囚われつつ、参加者のお一人お一人への邂逅とともに、写真を皆様にもお楽しみ頂けたら幸いである。



写真4 野尻抱影70歳誕生祝い 1955年11月20日 東京プリンスホテル